

## College of Micronesia-FSM

## カレッジ・オブ・ミクロネシア

## 所在地

P.O. Box 159 Kolonia Pohnpei 96941  
ホームページ: <http://www.comfsm.fm/>

主な対象学部  
外国語学部・学部留学

## 沿革

カレッジ・オブ・ミクロネシアは1972年に設立されたミクロネシア連邦唯一の高等教育機関である。教養学科、農業自然資源学科、経営管理学科、コンピュータ情報システム学科、教育学科、ホテル・レストラン経営学科、海洋学科、ミクロネシア研究学科等のコースが特色となっている。同カレッジはナショナル・キャンパスがポンペイ州パリキールにあり、ポンペイ州コロニアにポンペイ・キャンパス、チューク州・ヤップ州・コスラエ州の各州にもキャンパスがある。

## 特色

本学の学生は、現地のミクロネシア人学生に対して開講されているものと同じカリキュラムで学ぶことになる。そのため、留学に必要な英語のスコアは高めに設定されているが、その分、充実した内容の講義を受けることが可能となる。例えば、ナショナル・キャンパスでは、Business、Economics、Education、English、Speech Communication、English as Second Language、Exercise Sport Science、Social Scienceなどのコースがある。各コースは、さらに幾つかのセクションに分かれている(Social Scienceの場合: 太平洋の地理、社会学入門、ミクロネシアの歴史、経済など)。

英語力を鍛えるだけでなく、太平洋の島嶼国の文化や社会、環境問題について関心のある学生の応募を期待している。

## 宿泊

ナショナル・キャンパス内にある寮に入る。共同のシャワー・トイレつき。寮内でWi-Fiは使えるが、Skypeなどアクセスが制限されるものもある。3食すべてキャンパス内のカフェテリアを利用できる。

## 生活

ミクロネシア連邦は、海洋性熱帯気候に属し、1年を通じて温暖である。公用語として英語が普及しているが、現地語もヤップ語、チューク語、ポンペイ語、コスラエ語など多様である。現地の人々のほとんどはキリスト教徒である。通貨は、米ドルが流通している。代表的な現地の食材にタロイモ、ヤマイモ、ブレッドフルーツ、ココナッツなどがある他、米も食べられている。また、主要なタンパク源として、魚やカニ、貝類などの海産物、および豚肉、鶏肉が挙げられる。

マングローブ林や珊瑚礁、多様な動植物など、豊かな自然がミクロネシアの最大の魅力といえる。それらを自当てに、世界中から観光客が訪れている。ダイビングや遺跡見学など、この国ならではの楽しみも数多い。

## 条件

TOEFL (ITP) 500点 (iBT 61) と同等か、それ以上の英語力を有すること。

## 留学時期

通年の場合: 8月初め(秋学期開始時) ~ 翌年7月半ば(サマーセッション終了時)  
半年の場合: 8月初め(秋学期開始時) ~ 12月半ば(秋学期終了時)



## 南洋ポンペイ島での生活

外国語学部国際交流・国際協力専攻 2016年留学 大垣 直哉

ミクロネシア連邦という国を知っていますか? ミクロネシア連邦は太平洋に浮かぶ607島の美しい島々からなる国です。この体験記では、何故私はこの国への留学を決意し、その体験を通じて何を学べたのかをお話したいと思います。

留学を決意した理由は、ミクロネシア連邦といった日本と正反対の不便さ、文化が想定される国に行くことで、大学では決して経験することができない、大きな学びがあるのではないかと感じたのが、そもそものきっかけです。私の留学の動機は主に3つありました。一つ目は「自分の気持ちいい領域を抜け出す事」です。ミク

ロネシアに留学して本当の孤独を味わい、異文化で成長したいといった思いがありました。2つ目の理由としては、日本をよりよく知りたいという動機です。ミクロネシアという小さな島国で現地の人と生活すれば他の誰よりも異なった「観点」が手に入り、日本を外からの視点で眺めることができると思いました。3つ目の動機としては自分の視野を広げたかったからです。産業化されていない、自給自足の南洋の小島で数カ月暮らしてみれば、異文化などを通して自分の人生観に変化を起こせると思いました。

実際、日本人の交換留学生としては日本で初めてという事もあり、当初から様々な苦労を経験しました。しかし、辛い時も自分自身に常に問いながら、苦労も楽しみつつ乗り越えられたことは大きな自信につながりました。一番嬉しかったことは現地の友人が日本人とし

てではなく、私個人として扱ってくれた事でした。それらを踏まえて国籍による隔ては存在せず、むしろ異文化とは究極的には日本人も含め、「人」に対する理解である事を実体験しました。また「人に対するリスペクト」の重要性も理解しました。日本の礼儀と現地人との間のリスペクトの仕方には多くの共通点があり、その理由を現地人に尋ねたところ、そのほとんどが日本統治時代に日本人によって伝えられた文化であることがわかりました。過去の自らの人に対する接しかたを見つめなおし、リスペクトの気持ちと共にコミュニケーションを図った事は一層の異文化理解に繋がりました。およそ100年前に現地に暮らしていた日本人が伝えた文化を100年後にミクロネシアで再び学ぶことができよかったです。

授業外で特に印象に残っている事は現在ミクロネシア大学で教

鞭を執っている、2代目大統領との対話です。彼が大統領時代に苦労したこと、ミクロネシア連邦の観点から見たアメリカ観や国際政治に対する彼の考えを知れたことはこの上ない貴重な機会でした。

最後に

麗澤大学のプログラムでしか不可能な今回のミクロネシアへの留学は一生の宝物になりました。私は留学の醍醐味とは新しい観点を得ることで、日本や自分自身を従来とは異なる視点で眺める事ができるようになることだと思います。新たな観点を得て、人生観、「自分という存在」を発見したこの留学の後では、生きることがより一層面白く感じます。この留学を通じて「日本人として自分は何ができるか」といった課題を発見することができ、心の底から感じる問いを得ることができたのは、この留学のおかげだと思っています。